



秋田大学オンラインオープンキャンパスを開催



秋田大学オープンキャンパス 2020 の開催を7/23(木・祝)に予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、開催が中止となりました。中止に伴う代替措置として、オンラインオープンキャンパスを開催しました。

学校教育課程と地域文化学科の説明動画や、Zoomでのコース訪問への対応、ミニミニ講義の動画、教職員による相談室の開設など、多くの教職員が新しい形でのオープンキャンパスを模索しました。

また、多くの学生にキャンパスツアーや在学生による相談室、課程・学科・コース紹介に協力してもらいました。

【在学生による相談室】

学校教育課程 (特別支援)	4年	嶋崎 友貴
学校教育課程 (特別支援)	4年	田崎 安海

地域文化学科 (地域社会)	4年	森井 基貴
地域文化学科 (人間文化)	4年	小松 舞子
地域文化学科 (心理実践)	4年	渡邊 慈恩

【キャンパスツアー協力学生】

教育実践コース	3・4年	木村 綜一郎 菅 千聡 鈴木 薫子 佐々木 唯菜
英語教育コース	4年	加藤 礼奈
理数教育コース	4年	佐藤 温子
特別支援教育コース	4年	佐藤 暉
こども発達コース	4年	今 七海 原 和馬 宮崎 華帆
地域社会コース	4年	相原 安杜 後藤 花唯



国際文化コース 3年 新井 ゆう
塚本 杏奈
心理実践コース 4年 伊沢 慧
福原 苑華

他にも、多数の学生が協力してくれました。

オンラインオープンキャンパス限定コンテンツとして、オンラインオープンキャンパス開催日の2020年8月19、20日限定で、教育文化学部3、4年生の先輩が勉学を中心とする学生生活について話してもらった動画を公開しました。話してくれた学生は次の方々です。



左) 英語教育コース3年
小松千夏さん



右) こども発達コース4年
高瀬 陸さん



左) 地域社会コース
4年 相原安杜さん



右) 人間文化コース4年
小松舞子さん
(現国際文化コース)

オンラインオープンキャンパスで高校生を対応してみたの様子や感想

人間文化コース4年次 小松舞子

在学生相談室では、同じ教育文化学部の学生と共に、計3名の高校生の対応に当たりました。対面ではなくZoomでのやり取りだったことも相まってか、高校生の様子は少し緊張気味で、初々しさが感じられました。しかし、いざ本題に入ると、自分がやりたいことや興味のあることをはっきりと述べ、それがこの学部で学べるかどうかという質問してくれました。私が高校生の時は、地元秋田で勉強したい、けど国際的なことも学びたいという欲張りかつ漠然とした発想までしか至らなかったため、高校生のうちから自分の学びたい分野についてしっかりと考えているのは素晴らしいことだと感心しました。

そんな高校生たちに共通していたことは、「今後のために、高校生のうちに何をしておくべきなのか」、「高校と大学の違いは何なのか」という疑

問を抱えていることでした。実際にキャンパスへ足を運ぶことが出来なかったこともあり、大学や大学生のイメージが掴みづらかったのだと思います。そんな中、残りの限りある高校生活をどう過ごすべきなのか、今後の自分の見通しが立てづらいという漠然とした不安を抱えているようでした。その疑問に対し、在学生側で共通していた回答は、「勉強に限らなくとも、自分が好きだと思えるものを手放さないこと」、そして「そのことについてただ享受するのではなく、じゃあ自分はどうか考えるだろうかと、物事を自分の中に落としこんでみること」でした。大学での学びは、高校のように一問一答形式ではなく、答えのないことについて自分なりの考えを示すことが多いです。そのため、まずは自分が好きなことからでいいので、思考する癖を高校生のうちからつけてみてほしいと伝えました。

当たり前のことのようにありますが、彼らよりも一足先に大学生となった私たちの目線で振り返った「いままで」は、今の高校生たちの「これから」なのだ、改めて実感した日でした。

オープンキャンパス ZOOM 説明会の様子や感想

特別支援教育コース4年次 嶋崎友貴

8/29・30の二日間にわたってオープンキャンパスが行われた。例年は、秋田大学への進学を検討している多くの高校生がキャンパスに集まり、興味ある学部や専攻、コースに足を運ぶ。しかし今年は、新型コロナウイルスの影響で例年のように行うことはできず、ZOOMを活用してオープンキャンパスが行われた。

ZOOMを介したオープンキャンパスは初の試みであるが、当然メリットとデメリットがあると感じる。メリットは、全国どこにいてもリアルタイムで、コストをかけずにオープンキャンパスの企画に参加できることであろう。実際、今回のオープンキャンパスには秋田県外の高校生も多く参加していた。一方、デメリットは大学の空気感を感じることが難しいことが挙げられる。昨年までのオープンキャンパスに参加していた高校生は、本学の構内に足を踏み入れ、諸先生方の説明を聞いたり、先輩にあたる学生に質問したりすることを通して、自分が大学生になった時の姿をイメージしていたに違いない。今回のオープンキャンパスに参加した県内在住の高校生の中には、「両親に大学の周辺を車で連れてってもらい、大学受験へのモチベーションを上げた」という声もあった。

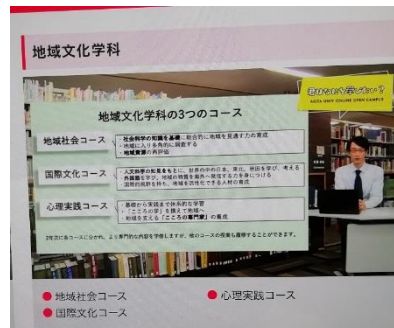
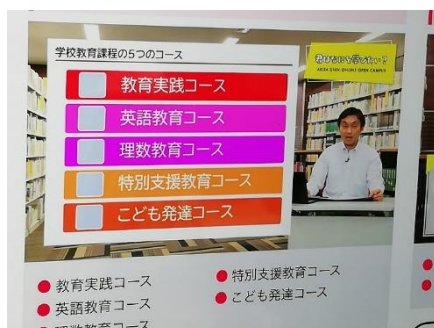
ZOOM説明会において、高校生たちは「秋大生」になった時のイメージをふくらませるかのよう、限られた時間内で「大学生活はどのような感じで

すか?」「秋田大学の良さは何ですか?」など、本学に対して興味津々の様子だった。

高校生の熱を帯びた質問に答えていく中で、私は徐々に内省的になり、本学に入学して成長した自分自身に気付くことができた。彼らの質問に答えることを通して、自分自身に対する再発見、本学での学びの再認識につながった。「人に教えることは、自分も同時に教わっている。」そんな感覚をもつことができたのも、本学に入学したからこそ得られたのである。

未だコロナウイルス収束の見通しの立たない情勢ではあるが、今回のオープンキャンパスに参加し

た高校生には「次に会うときはFACE TO FACEで!」と私は伝えた。キャンパス内で「お疲れ!」と笑顔で挨拶を交わすことが当たり前前の日常に戻り、来年のオープンキャンパスは大学構内と ZOOM のハイブリットで行われることを願っている。



【キャンパスツアー動画】



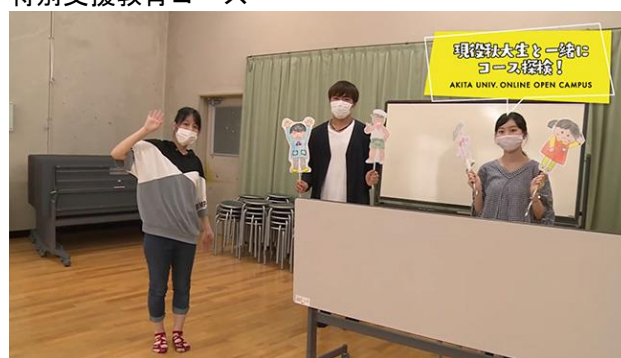
教育実践コース



特別支援教育コース



英語教育コース



こども発達コース



理数教育コース



地域社会コース



国際文化コース



心理実践コース

【ミニミニ講義動画】



保健体育科教育学演習Ⅲ 松本 奈緒



情報教育実践論Ⅰ 細川 和仁



異文化理解Ⅱ Paterson Adrian David



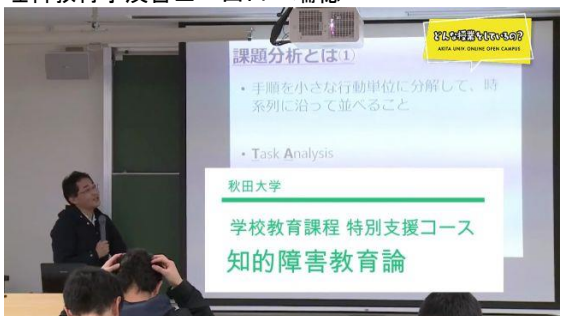
社会学概論 和泉 浩



理科教育学演習Ⅲ 田口 瑞穂



マーケティング・リサーチ 益満 環



知的障害教育論 前原 和明



経済学概論 荒井 壮一



外国語発展演習 IVD (中国語) 羽田 朝子



心理学実験 II 中野 良樹

音楽教育研究室から～在校生ガイダンス・オリエンテーションに参加して

1 年次 柴田 光友

私が音研の行事に参加したのはこれが 2 回目になります。1 回目は同級生のことすら詳しくわからない状態での zoom 会議を使ったオリエンテーションだったので、先輩や先生、同級生の空気感がわからず緊張していました。しかし、今回は実際に同じ部屋に集まってオリエンテーションができ、音研の空気感をリアルに感じることができたため、過度な緊張をせずにオリエンテーションに臨むことができました。短い間ではあったものの、実際に先輩や先生の反応ややり取りを見ることができて、音研に入ったという実感が持てたので、今回のオリエンテーションに参加することができたことはとても良い機会だったと思います。まだこの状況に快報はみられませんが、個人的にはこのような交流の機会が今後もあると単調になりがちな日々の中での刺激になってうれしいです。

2 年次 藤原 真優

在校生ガイダンス・オリエンテーションでは、音楽教育研究室の皆さんや先生方との久しぶりの再会となりました。日頃通っていた学び舎への訪問も数か月ぶり、大学生活が大きく変化していたのだということを改めて感じました。ガイダンス・オリエンテーションは参加者全員の自己紹介や近況報告に始まり、今後の演奏会や授業に関するお話を聞いたり相談し合ったりする時間となりました。近況報告では最近家でどのように過ごしているのか、マイブームがあるか、何か大きな変化はあったかなどの一言コメントを交えて楽しく交流することができてよかったです。昨年の対面授業における大学生活では、同学年の音楽

教育研究室の仲間たちと共に行動することが多く当たり前のように毎日と一緒に過ごしていました。そのため、連絡は取りあっても実際には会い難い今の状況はさみしいものがあります。この機会に皆さんと会うことが出来て嬉しかったです。

3 年次 武石 早穂

今年度は 3 年次として研究室をとりまとめている立場でしたが、演奏会のみならず新入生の皆さんとも直接顔を合わせることができず、非常に歯がゆい思いをしていました。毎日 zoom の画面に友人の名前が並んでいるのを見ていましたが、やはり孤独感は拭いきれません。そのような中、今回在学ガイダンスを設けていただき、楽しいひとときを過ごしました。久しぶりの研究室の雰囲気、の明るさに懐かしさを感じると共に元気をもらいました。電話や LINE など通信手段は数多くありますが、直接会って会話することの安心感は何物にも代えられません。コロナ禍により新しい生活様式という大きな変化が強いられています。まだ見通しが立たない状況ではありますが、後期には対面授業や演奏会ができることを切に願っています。



大学院説明動画を公開

新型コロナの影響で、対面による大学院説明会が開催できなかったため、大学院説明動画を8月24日に学部研究科HPにアップしました。教育学研究科全体は佐々木雅子学務委員長、入学試験は北島正人学務副委員長、教職実践専攻は鎌田信専攻長、学校マネジメントコースは原義彦コース長、カリキュラム・授業開発コースは田仲誠祐コース長、発達教育・特別支援教育コースは藤井慶博コース長、心理教育実践専攻は中野良樹専攻長が説明を行っています。

https://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_movie.html

教育学研究科 説明動画

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、対面での説明会の実施に代わり、大学院の説明動画を配信します。

研究科全体の紹介、各コースの紹介、入試に関する説明を配信しています。動画の視聴後はアンケートにご協力くださるようお願いいたします。

大学院説明に関するアンケート

秋田大学大学院教育学研究科の紹介

教育学研究科の全体説明 (10:30)

令和3年度大学院教育学研究科入学試験に関する説明

令和3年度入試説明 (8:15)

教職実践専攻(教職大学院)

高度な教育専門職としての教師を養成

※全国の国立大学法人教育系大学 → 教職大学院へ移行

学ぶ意欲の低下

いじめ・不登校

社会意識・自立心の低下

社会性の不足

課題の複雑・多様化

➔

高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員が求められている

学校マネジメントコース

◆学校経営や改革を推進する組織マネジメント力に優れたスクールリーダーを養成します。【現職教員対象】

▶地域や学校において指導的役割を果たすために有効な理論に基づいて組織マネジメント力を育成

▶優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダーの養成

令和元年度修了生は、教頭、学年主任等として活躍!!

カリキュラム・授業開発コース紹介

カリキュラム・授業開発コース

目的】高度な授業力やカリキュラム開発力、教科指導力を備え、校内外の授業研究をリードできる教員を育成

対象】学部卒業生・現職教員対象/2年プログラム

発達教育・特別支援教育コース

目的】級経営、教育相談、特別支援教育等を担う、高度な専門性有する教員を養成。

【対象】学部卒業生・現職教員 / 2年・3年プログラム

教職大学院で開発した研究成果を所属校で紹介

心理教育実践専攻の紹介

秋田大学大学院教育学研究科

心理教育実践専攻の紹介

秋田大学大学院教育学研究科 2021

コロナ下での学生生活・テレビ編

こんにちは。教育文化学部地域文化学科心理実践コース二年次の佐藤翔太です。学生協議会の一員として、「みなおと」に寄稿するべく筆を執らせていただきました。

私がこの原稿を執筆している段階ではまだ前期期間ですが、皆さんがこれを読むのはちょうど前期の講義が終わり、夏期休業に入る頃でしょう。未来予知を試してみます。……まだコロナウイルスは猛威を振るっているでしょう。皆さんは三密を避けて行動し、外出時にはマスクを着け、手洗いうがいを徹底しているでしょう。

何が言いたいかという、「コロナの勢いが中々収束しませんね」ということです。もはやコロナ下での過ごし方が日常的になっている状況です。一年前はコンビニのレジに仕切りなんてなかったのに。今は夏真っ盛り、ただでさえ暑いのにマスクをつけなければならないのは厳しいですね。

学生協議会員として原稿執筆をしています、これまで寄稿して下さった他の協議会の方々のような立派なお話は残念ながらできません。程度の低い話つまらないかもしれませんが、最後まで読んで頂けると幸いです。

さて、これから長期休暇を迎える皆さんは何をして過ごすのでしょうか。勉強に励んだりアルバイトに励んだり、色々あると思いますが、それは皆さんの自由です。ちなみに私はテレビを見て過ごします。NHKのEテレです。

私がよく見るのは「ゴー！ゴー！キッチン戦隊クックルン」で、ご存じない方のために簡単に説明すると、クックルンというヒーローが料理を作って食べて戦う食育番組です。子どもにも分かりやすくレシピを教えてくれるので、料理慣れしていない方にもオススメです。良かったら見てみて下さいね（平日の夕方に放送しています）。

今回原稿に掲載した写真は、クックルンで紹介されていたレシピを基に作ったものです（よく見ると所々粗がありますがご了承下さい）。「ハートのフレンチトースト」なのですが、ハートに見えますか？クックルンなんて小さな子どもが見るものだろうと思う方もいらっしゃると思いますが、意外と参考になります。コロナの影響で世の中どんよりしているので、こういったキラキラした番組を見ると癒しに

心理実践コース2年次 佐藤 翔太

なるかもしれません。おいしそうな食べ物は見るだけで幸せな気持ちになります。作ってみると実際においしさを感じられます。昔Eテレをよく見ていた方は、大学生になって見直してみると、また違った視点で見られるかもしれませんね。

ちなみにEテレは子ども向けの番組ばかりではなく、様々な分野から教育的な番組が放送されています。子育て番組では子どもの発達といった内容を簡単に取り扱っていたり、手話に関する番組や科学的な番組が放送されたりしています。そんなに目を食いしばって見ることはありませんが、「ちょっと暇だな」と思った時になんとなく見るのもいいのではないのでしょうか（暇を持て余して時間を浪費しているのは私くらいかもしれません）。

「テレビを見て過ごそう」という何とも大学生らしからぬ話で終わってしまいましたが、後期の授業もどうなるか、そしてその先もコロナが落ち着くか分からず不安な時こそ、ゆったりした気持ちでいることが大事なかなと思います（だらだらすることを推奨しているのではないですよ！）。

今は大学のキャンパスもゆったり休んで、皆さんを迎え入れる準備をしています（少しずつ開放されてきていますが）。皆さんもゆったり休んで、気負わず過ごしましょう。では、拙い文章でしたが、最後まで読んで下さりありがとうございました。



【研究紹介】

理科教育を科学する，基礎研究の世界によろこそ！

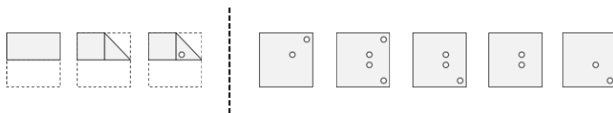
英語・理数教育講座 原田勇希

私は理科の学習者である児童生徒を対象とした心理学的研究を専門としています。以下に主な研究テーマを3つ紹介させていただきます。

1. 視空間認知能力の個人差による理数系科目の動機づけ形成プロセスに及ぼす影響

理数系教科の得意・不得意には大きな個人差があることが知られています。私はこのような個人差が生じるメカニズムを研究しています。

近年の研究によって、視空間認知能力の個人差が、他要因よりも理数教科の学業的達成や動機づけを比較的鋭敏に予測できることが明らかになりつつあります (for reviews, Khine, 2018; Uttal & Cohen, 2012)。なぜかという、理数教科の問題解決場面では他教科よりも2次元または3次元の図的表現が多用されるからであると考えられています。



視空間認知能力を測定する課題の例

左のように折り紙を折り穴をあけると、開いたときどこに穴があるでしょう (右の図から選ぶ)。制限時間内に、できるだけたくさん、できるだけ正確に解くことが求められます。

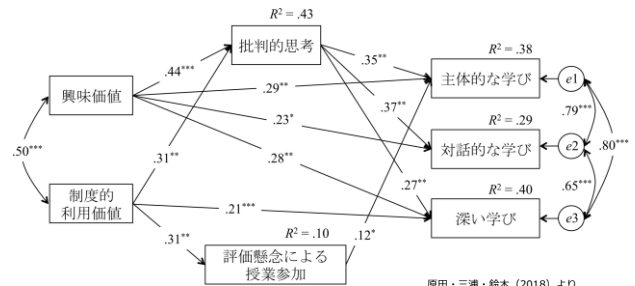
私はこれまで、基礎的研究として、視空間認知能力の低い子どもが特につまづきを経験しやすい学習内容の同定や、学業的達成と動機づけへの影響プロセスを検討してきました。また、中学校教員と連携しつまづきの軽減を目指した実践的研究にも取り組んできました。

2. 理科学習に対する動機づけ (学習意欲) の研究

動機づけ (学習意欲) は理科教育学における重要な研究テーマです。以下に一つの例を紹介します。

「理科の勉強は高校入試に役に立つ」といった制度的利用価値について、理科教師は直感的に「主体的・対話的で深い学び」にとって良くない動機づけ」と認識しているようでした。しかし、熟練の理科教師とその指導を受ける中学生に質問紙調査を行って見たところ、教師は制度的利用価値を高く認知している生徒を「主体的・対話的で深い学び」ができていると評価していました。詳しく分析すると、制度的利用価値を高く認知する生

徒は、理科授業中に批判的思考 (critical thinking) を働かせる傾向があり、その批判的思考の傾向が教師の評価に影響を及ぼしていたことが分かりました。



原田・三浦・鈴木 (2018) より

生徒の理科に対する動機づけと授業中の思考活動、および教師による評価の関連の分析

つまり、制度的利用価値の認知は、理科教師が考えるようなネガティブな動機づけ要因ではないかもしれません。私はこのような理科教育に関する「直感」に対して、実証的な研究方法で挑戦することが大好きです。

3. 素朴概念と科学概念の処理過程の検討

近年、自然に対する素朴概念は、正しい科学概念を獲得した後も脳内に残り続けることが、反応時間計測や脳科学的手法を用いた研究によって明らかになりつつあります。脳波を加算平均した事象関連電位 (Event-Related Potential) を用いた研究は、ミリ秒単位で進む科学的思考のプロセスを明らかにしつつあります。例えば、素朴概念に基づく処理過程は刺激提示から 180~350ms に (P2, N2)、科学概念の検索と素朴概念の抑制過程は刺激提示から 500~700ms (LPP) に同定されています (Zhu et al., 2019)。

私は今年度から、素朴概念と科学概念の葛藤を含む文章 (例: 軽い物体より重い物体の方が早く落ちる) の処理過程と熟達化メカニズムの解明を目指す研究に着手しました。具体的には、文節の刺激間隔を操作したときの、文章の意味的逸脱 (正確には、予測可能性の低い刺激) に対して生じる N400 という頭頂部優勢の陰性電位の振る舞いに注目しています。素朴概念と科学概念の正体を明らかにし、さらに熟達した科学概念の表出に関わる個人差変数を特定できれば、きっと理科教育実践に新たな示唆をもたらすはずで

【研究紹介】

The Yellow Pimpernel and the Mystery of M.H. Thamrin's Death in 1941

Brad Horton (International Cultural Studies Program)

While studying the Japanese occupation of Indonesia (1942-1945) and the development of Indonesian pop literature (c.1910s-1942), I discovered a mystery about a mystery. Most Indonesian publications followed ethnic or racial lines, Chinese Indonesian or “native” Indonesian. However, during the 1930s boom in private publishing, the dynamic, multi-ethnic Kabe (Kolff-Buning) developed out of older Eurasian publishers. Their popular magazines, novelizations of local films, “real life” novels, and detective mystery novels featured writers from different ethnic groups and backgrounds—illustrators, novelists, drama directors, and journalists!

This was a tense period. World War II had erupted in Europe in 1940, and as Germany occupied the Netherlands, Queen Wilhelmina fled to England. Meanwhile in Indonesia, Germans were arrested, and Indonesians working with Japanese were suspect. Even before this, one journalist, Saeroen, was jailed for trying to purchase a newspaper with Japanese financial support. Other journalists were jailed for libel or other “press crimes.” In 1940, a team of Japanese trade negotiators arrived, remaining until mid-1941 when the US and the Dutch froze Japanese assets. The looming war and the strong Dutch colonial state threw a long shadow on Indonesia, and freedoms were clearly delimited.

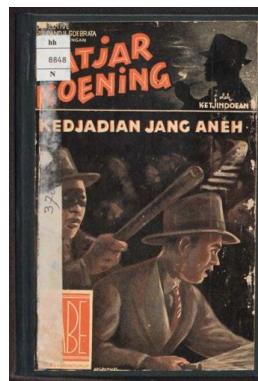
Among the Kabe publications were the “Yellow Pimpernel” detective novels, solved by a private detective, Raden Panji Subroto. The Yellow Pimpernel stories were part of a popular new genre, developed out of Sherlock Holmes and Scarlet Pimpernel novels and films. The author used a pseudonym, Kecinduan, the childhood name of a hero in a West Sumatran traditional story. To my amazement, one sensational story seemed to be about the death of a prominent Indonesian nationalist, Mohamad Husni Thamrin, who died in early 1941, under house arrest and suspicion of

working with the Japanese. An impossibly fantastic story, was there any connection to reality?

In this story, the Indonesian political leader, a man called Husain Damiri, dies while under house arrest, and the family asks Subroto to investigate. The detective discovers that *sabon dama* filled with poison gas had been blown through a window. Subroto discovers the killer was a journalist who had publicly attacked Husain, but moments before Subroto visits the journalist, he was also killed. Convinced this must be the work of his long-time enemy, Subroto discovers the Yellow Pimpernel's hide-out, but is bludgeoned and the Yellow Pimpernel escapes.

Readers in 1941 would have known this story was about Thamrin's January 1941 death, which was a major political event. Furthermore, various facts about Husain Damiri match Husni Thamrin, besides the similar names. Thamrin had a public fight with a journalist, who was then hired by the Dutch Wartime Propaganda Service as its top Indonesian official. Thamrin also had connections with Japanese negotiators, helping them to hire an important nationalist figure, E.F.E. Douwes Dekker, to do economic background research.

Wartime publications showed that the author was a West Sumatran writer and former government official who like Thamrin had served on the Batavia City Council. This was thus a story written by a colleague, perhaps hinting something which could not be told without being arrested and the publication



banned.

A 1970s article published at Waseda University by Taniguchi Goro, a Japanese journalist who lived near Thamrin in 1940 provides a hint of what might have happened. Taniguchi met the “nephew” of Thamrin after the funeral and asked him whether Thamrin had black saliva coming from his mouth when he died. In shock, the nephew said “yes! How did you know?” Taniguchi had his own sad story of his sick child who had been euthanized by a German doctor with an injection of medicine. “Did your family call for the doctor?” he asked. “No, the doctor just came.”

In 1943, Miyatake Seido, an expert on

Indonesian language and literature, wrote that this book *was* about the death of Thamrin. If a resident of Nara knew this story was about the killing of Thamrin, Japanese in Indonesia probably believed Thamrin was poisoned as well. After the occupation started, the last doctor to see Thamrin, the Indonesian Dr. Kayadu, was arrested and killed by the Kenpeitai.

This story illustrates how closely tied pop literature can be to historical events—they are part of the same society. We can find clues to mysteries—not just how people understood Thamrin’s death, but also that both Thamrin and Dr. Kayadu might have died as part of a secret war.

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校がミニ学校展を開催

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校は7月30日から8月7日まで秋田市役所1階市民ホールでミニ学校展を開催しました。

本学教育文化学部附属特別支援学校が地域理解啓発を進めるため、活動や行事の様子をまとめたパネルや、児童生徒の作品や作業製品を県内の銀行や郵便局、公共施設等で展示を行っているものです。

昨年度は8か所で9回実施しました。毎年少しずつ展示場所を広げています。今年度は11回行う予定です。市役所での展示は昨年度から行っています。

今年度も多くの方々に展示を見ていただき、温かい言葉をたくさんいただきました。

【全学HPより転載】



新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組み

【全国】

7/31：東京都新規感染者 463 名で 400 名超え
8/7：秋田市等で 10 名の感染確認、クラスター発生

【秋田大学】

8/6：課外活動で県外遠征（試合、合宿を含む）を行った場合も、2 週間の自宅待機（練習の自粛も含む）及び健康観察。県内において県外団体等との試合等を行った場合にも、2 週間の自宅待機及び健康観察の要請。
8/17：秋田大学祭の中止決定

* 一部不明・不正確な箇所があります

8/19・20：7/23 に予定していたオープンキャンパスを中止し、代替としてオンラインで実施

【本学部・研究科】

8/24：大学院説明動画をHPにアップ

【附属学校園】

8/7：附属小・中学校での部活・スポ少の 8/19 までの休止（秋田市の決定による）

後期の授業の実施について

学生・院生のみなさんへ

新型コロナの感染拡大により、前期から 9 月いっぱい、すべてが遠隔授業となり、また、大学への入構も、ガイダンスや、卒論などのための研究目的、就職支援など、一部しか認められず、昨年度までの通常の大学生活とは一変してしまい、残念に思っている人も多いと思います。

後期の授業からは対面と遠隔（基本的にオンデマンド型）の両方を実施する予定ですが、感染状況によってはまたすべて遠隔となる可能性もあります。

8 月 19 日に総合学務課から、「後期授業については感染対策を行った上で、一部科目は対面授業とし、その他の科目は引き続き遠隔授業を実施する方向で検討しています。」との通知が学生向けに出された後、本学部では、基礎疾患があるので、すべて遠隔にしてほしいという意見と、逆に小中高は対面でやっているのだから大学もすべて対面にしてほしいという意見、遠隔と対面の併用ではなく、どちらかにしてほしいという意見が寄せられています。

8 月 24 日には全学より学部に対して、「対面授業の実施は真に必要なもの（授業内容的に対面授業で無ければ教育上の不都合が生じると各部局において判断するもの）に限定する」ように通知されています。

大学と小中高との違いですが、

○県外出身者が多く、帰省などで県外移動の機会が多い。部活や研究などで、県外移動の機会が

教育文化学部長・教育学研究科長 佐藤 修司
多い。

○バイトで居酒屋などに勤める者も多く、県外者との接触の機会があり、感染者との接触の危険も大きい。

○実習などで学外の子どもなどに会う授業があり、一人でも感染が発生すれば、相当の影響が及び、最悪の場合、実習等ができなくなる。

○大学は様々な授業を選択できるので、小中高のようにクラス単位で対策を取ることができない。大人数の授業も数多く存在する。

○授業の前後、学生の自習室、トイレ、生協など、様々なところで三密が発生するが、それを防止する手立てがない。消毒、換気の徹底も難しい。

○大学に入構している教職員、学生に感染者が出た場合、キャンパスないし建物を閉鎖して消毒する必要があり、業務に大きな影響が出る。

○クラスターが発生すると、大学の責任が問われ、社会的評価が下がるだけでなく、学生のバイト、就職などにも影響が出るおそれがある。

などなど、考慮しなければならないことが多くあります。

今も、感染状況が日ごとに変化する中ですが、後期の授業形態について検討を行っているところです。以下のものは、一部省略していますが、8 月 6 日と 8 月 27 日に発出したものの合体要約版になります。

.....

令和 2 年 8 月 6 日・27 日
学校教育課程研究室主任

地域文化学科コース主任 各位
教育学研究科専攻長
各実習実施委員会委員長

教育文化学部長・教育学研究科長

教育文化学部・教育学研究科の専門科目についても、対面での実施が可能となった場合の検討を進めて行く予定です。

ただ、「新しい生活様式」に対応するだけでなく、さらに、昨今の感染拡大状況も踏まえ、後期から、昨年度までの通常の状態に戻ることは不可能であり、授業内だけでなく、授業の前後も含めて感染拡大防止が強く求められます。

後期開講予定の教育文化学部・教育学研究科の専門教育科目について、対面授業での実施を可能にしたいと思っておりますが、教室の確保及び3密回避、授業終了後の3密回避等の観点から、全ての授業科目を対面で実施することは難しく、また対面授業科目の教室確保が必要となります。

さらに、対面授業とライブ型の授業の併用は、学生の受講場所の確保や自宅との往來が必要となることから、併用が難しく、遠隔授業とする場合は原則オンデマンド型とする必要があります。

全学からは最近の感染拡大状況を踏まえて、遠隔授業の割合を5割以上とすることが求められています。コース等の単位でおおよそ遠隔授業の割合が5割程度となるように、可能な範囲で調整の上、提出するようにお願いします。

①講義形式の授業は、原則オンデマンドとしてください。

他の授業形式についても、オンデマンドでの開講が可能なものは、オンデマンドでの実施をお願いいたします。

②上記講義形式の授業について、「対面授業での実施が必要な科目」については、その理由を記載して下さい。

③実験・実技・実習・演習科目で、対面での実施が必要となる科目については実施方法の検討をお願いいたします。実施にあたり3密回避の徹

底を基本とし、それぞれの授業の形態に応じて、感染防止策を徹底したマニュアルを作成いただく必要がありますので、該当する科目につきましては、各コース・研究室・授業担当教員等でご検討をお願いいたします。

例：より大きな教室等に移動する

受講者を分割して、別教室で同時進行する（複数教員またはZoomの使用）。

受講者を分割して、時間を分けて実施する。

受講者を分割し、対面で受講する者と録画で受講する者を隔週で入れ替える。

④実験・実技・実習・演習科目について、受講者人数が多く教室の確保が難しい科目や、Zoomで行うことが望ましい科目（教職実践演習等）については、ライブ型授業が行える曜日・時間割の設定も検討しますので、その旨を記載してください。

（後期 木曜日の午後など）

⑤1年次学生も含めて、週に少なくとも一度は対面の授業を受ける機会が確保できるように配慮してください。

⑥教養基礎教育については、すでに希望を提出されていると思いますが、上記の方針に沿って改めて検討していただくようお願いいたします。

※オンデマンド型の授業について、授業の録画映像をStreamに掲載いただく方法で構いません。動画のアップロード方法等については、遠隔授業のサポートチームにお尋ねください。

※オンデマンド型でも、webclassのピアレビューの機能を使用して、グループ協議などを擬似的に行うことが可能ですのでご検討ください。

※本件調査後に後期授業の対面授業での使用教室について、改めて教室の調整をする必要が生じることが想定されます。

現在の教室・時間割での開講が難しい科目が生じた場合には、教室・時間割等の変更について検討をお願いする場合がありますので、お含み置き下さい。

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音(かねのね)」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。